

特定非営利活動法人

宮入
慶之助
記念館



宮入慶之助記念館だより

特定非営利活動法人宮入慶之助記念館
2020（令和2）年11月6日発行

第30号

巻頭言 感染症の「読むワクチン」 名誉館長 太田伸生

昨年11月頃から、私が所属する国際保健関係学会のメーリングリストに「中国武漢で新しいウイルス感染流行が発生している」との情報が飛び交い始めた。やがてそれは爆発的流行になり東京オリンピック・パラリンピックを延期に迫り、大きな社会現象と化したことはご承知のとおりである。経済を破壊し、文化や教育にも大きな制限をかけ、不安で憂鬱な空気が全地球を覆っている。

感染症は文化の破壊も創造も促したことは事実である。中世ヨーロッパで荒れ狂ったペストは同時に多くの芸術作品のモチーフになり、マラリアのおかげでジントニックが酒愛好家に届くことになった。今般の新型コロナウイルス感染流行が後世に何を残すかは知る由もないが、企業のリモートワークや学校の遠隔授業の浸透は社会構造を大きく変えつつある。特に交通業界には計り知れない影響が進行中である。航空機ファンである私は5年後に生き残る航空会社は如何にと危惧しつつ、空港での機体撮影に励んでいる。

新型コロナウイルス感染予防には「三密を避ける、マスクを着用する、手を洗う」などが有効である。当初感染様式はコロナウイルスに共通する「飛沫感染」だから、感染者と1m以内でなければ感染しないとタカをくくっていた。しかし現実には意外と手強い相手だとして、より厳重な措置が叫ばれている。社会全体がその行動様式を受け入れているのは治療薬、予防薬、ワクチンなどの開発が進まないことが一番の理由であろう。医学の武器が未整備な感染症に対しては、21世紀の人類も無力なのである。しかし「三密を避ける」という予防行動は、わずかながら新型コロナウイルス感染症に関する情報が解明されたことによって定着した。そしてそれには確かな効果は認められている。

100年前を振り返ってみよう。多くの感染症には治療薬やワクチンは未開発であった。細菌やウイル

ス感染症に対してはワクチンや治療薬が開発されて状況が劇的に変わったのだが、寄生虫感染症は100年経っても事情は大きくは変わっていない。今日でも「三密を避ける…」式の対策が予防の柱である。マラリアの場合、治療薬は開発されるものの10年も経たずに薬剤耐性が出現し薬が効かなくなる。そのためにWHO世界保健機関はマラリアの予防戦略に「蚊帳を使え」というキャンペーンを展開している。確かに効果があり、マラリア感染者は21世紀に入って激減している。21世紀の今日、マラリア対策の武器は「蚊帳で寝ること」なのである。

住血吸虫感染も状況は似ている。治療薬は開発されたが、薬剤耐性の出現は常に危惧されるし、人々の行動様式こそが予防に最も強力に影響する。マラリアが蚊から媒介される知識が今日の対策に活かされているように、住血吸虫も宮入慶之助の発見により水中で感染するという事実の認識が今日でも予防の大きな柱である。日本国内で住血吸虫症流行が終息した40年以上前は有効な治療薬も開発されていなかった。人々は水との接触リスクを正しく認識して行動したことがその成功につながったのである。

感染症の正しい知識とは「読むワクチン」と言われる。宮入慶之助の発見は住血吸虫症に対する「読むワクチン」を開発したのである。しかし通常のワクチンと違って、「読むワクチン」はすぐに劣化する。山梨県の流行地では、住血吸虫対策を終了して20年経過しただけで、中学生の住血吸虫感染予防の知識はほぼゼロに帰ってしまった。新型コロナウイルス感染でも、当面は「読むワクチン」を活用するしかないが、それはインフルエンザ予防にも確実に効果を持つ「読むワクチン」である。山梨県の事例に倣えば「読むワクチン」は常に更新する必要があることを宮入慶之助が教えてくれている。私たちの努力を叱咤激励しているのだと思う。

長野市民新聞令和2年6月16日付「宮入慶之助記念館(篠ノ井西寺尾)」の記事にある博士自筆の掛軸いそしの漢詩から、博士が勉学こはくこうに勤んだ原点が漢詩漢文にあることがわかってきた。

発端は掛軸の漢詩が詩聖杜甫の古柏行と題した七言二十四句からなる唐詩で、詩の大意は、前段きしゅうで夔州の諸葛孔明の廟前にある老柏樹の威容を称え、中段では自身が棲んだ成都近郊にある武侯祠(孔明の廟)の廟前にもある柏樹が霜雪に屈せず幾百年を経て菁菁としている様子を称え、後段では柏に托して作者の感慨を述べている。

一説に数十万首が残ると云われる中国詩の中から博士が杜甫のこの詩を選んで座右の銘とも云うべき148字を自筆で精魂込めて一字の乱れもなく掛軸にした心意は、幼い頃地元の漢学塾で学び敬愛した詩聖杜甫と諸葛孔明とに共感されたからではなかろうか。

江戸時代松代藩には佐久間象山(1811・文化8～1864・元治元年)が教えた松代藩校のほか民間には幾つかの寺子屋があった。

当時は漢学の素養を身に着けることがステータスであり、父親敬長氏(1831・天保2～1909・明治42)は松代藩士として、佐久間象山とも親交があった。明治維新により禄を失い学問への関心が高く自宅で寺子屋を開いて村内の子どもたちを教えていた。幼い博士は向学心に燃え隣で聞いていてすぐに覚えたと言われ、学問の基礎となる漢詩漢文をしっかりと身につけられたであろうことは想像に難くない。

地蔵峠を馬で越えて上田の活門禅師に通った象山に倣い、博士も上京する前に上田変則中学校(現上田高校の前身)に通い、帝国大学医学部医学予科に進む。

藩校に対して当時民間には、松代藩士山寺

常山おおくぼとうさいの門下で17歳の大窪董齋が藩内古森村に開いた漢学塾・滴翠詩屋があった。董齋は常山の信頼が厚く佐久間象山とも詩を論じ、門弟は常に200人前後がいたといわれる。

滴翠詩屋の主宰は大窪董齋・敏齋親子の2代にわたり、2代敏齋(1847・弘化4～1922・大正11)と博士(1865・慶応元年～1946・昭和21)とは18歳違いで、動乱の幕末から明治にかけて多感な時代を同じくし、藩内近隣同士で交流があったことが容易に推察される。

奇しくも、地元の人々が董齋・敏齋の功績を称えて用意した楽地らくちには柏樹が植えられ現在も菁菁としている。恐らく博士はこの古柏をご存じだったに違いない。

冒頭掛軸は座右の銘としたが、柏は墓に植える樹木でもあることから、掛軸は恰も博士ご自身のモニュメントとなった感がある。

楽地は昔滴翠詩屋があった近隣で篠ノ井東中学校の東にあり、董齋・敏齋の顕彰碑があり季節の花が楽しめる。

先年、共に董齋・敏齋の子孫にあたる松代町の宮崎真氏(元県高校教師)と篠ノ井の大久保博章氏(篠ノ井地区区長会長)により、董齋の詩約330首を載せた漢詩集「滴翠詩屋吟稿・大窪董齋・付敏齋



▲柏樹が植えられた楽地 (長野市篠ノ井小森)

の詩」が出版され長野県立図書館で閲覧することが出来る。

こはくかう 杜甫 こう
古柏行 杜甫 行…漢詩の一体

本文 書き下し文（語釈）

孔明廟前有老柏 孔明の廟 前に老柏有り
(孔明廟…夔州白帝城の西にある 老柏…柏の古木。)

柯如青銅根如石 柯は青銅の如く根は石の如し
(柯…枝。)

霜皮溜雨四十圍 霜皮雨を溜らす四十圍
(霜皮…蒼白の樹皮 圍…かかえ。)

黛色參天二千尺 黛色 天に參る二千尺
(黛色…樹木の色。)

雲來氣接巫峽長 雲來って氣は巫峽に接して長く
(氣…古柏にただよう雲氣。)

月出寒通雪山白 月出でて寒は雪山に通じて白し
(雪山…大雪山。)

君臣已與時際會 君臣已に時と際會す
(際會…時機に出あう。)

樹木猶爲人愛惜 樹木猶お人に愛惜せらる
(愛惜…愛して大切にする。)

憶昨路繞錦亭東 憶う昨路錦亭の東を繞る
(錦亭…杜甫の浣花草堂)

先主武侯同閼宮 先主 武侯閼宮を同じうす
(武侯閼宮…孔明の祠廟。)

崔嵬枝幹郊原古 崔嵬たる枝幹 郊原に古り
(崔嵬…樹木が高く聳える例え。)

窈窕丹青戶牖空 窈窕たる丹青 戶牖空しかりき
(窈窕…上品で奥ゆかしい 丹精…廟の色。)

落落蟠踞雖得地 落落蟠踞して地を得と 雖も
(落落…廓大の貌 蟠踞…根が蟠る。)

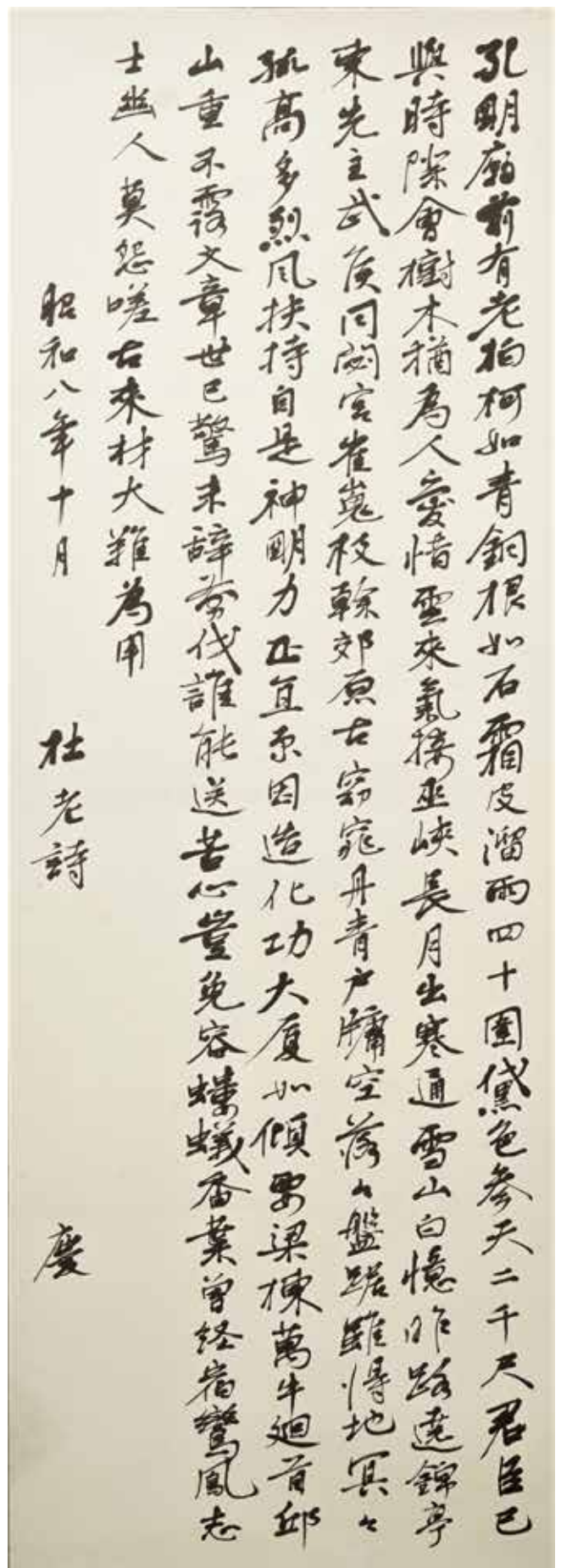
冥冥孤高多烈風 冥冥孤高 烈風多し
(冥冥…雲気の中で暗いこと。)

扶持自是神明力 扶持 自らはれ神明の力
(神明…神。)

正直元因造化功 正 直元より造化の功に因る
(正直…柏が真つ直ぐ造化功…天地造化の作用。)

大廈如傾要梁棟 大廈如し 傾いて梁 棟を要せば
(大廈…大きな家。)

萬牛迴首邱山重 萬牛 首を廻らして邱 山のごとく重からむ



▲宮入慶之助氏自筆「古柏行」漢詩

不露文章世已驚 ぶんしょう あらわ よすで おどろ 文章を露さざるも世已に驚く
(文章…木の木目。)
 未辭剪伐誰能送 いまい せんぼつ じ たれ よ おく 未だ剪伐を辭せざるも誰か能く送らん
(未辭…厭わない。)
 苦心豈免容螻蟻 くしん あ まぬが ろうぎ い 苦心豈に免れんや螻蟻を容るるを
(苦心…木の心が苦い 螻蟻…けらやあり。)
 香葉曾經宿鸞鳳 こうよう かつて らんほう やど 香葉曾經鸞鳳を宿らしむ
(鸞鳳…君子をたとえて云う。)
 志士幽人莫怨嗟 ししゆうじんえんさ なか 志士幽人 怨嗟する莫れ
(志士幽人…志ある人、密かに世に隠れている人。)
 古來材大難爲用 こらいざいたい よう な がた 古來材大なれば用を爲し難し
(材の大なるものは用いられにくい。)

《通釈》

きしゆう
 夔州の孔明の廟の前に老柏樹がある。枝は青銅の如く、根は石の如く、蒼白の樹皮には雨をしたたらせて、その幹は四十抱えもあり、高さは二千丈、鬱蒼たる暗緑の色が天に混じってそそり立つ。大木ゆえ、この樹にただよう雲気は遠く巫峽の氣に通い、月出ずれば遥かに白皚皚たる雪山の寒光に相通ずる。孔明と先主劉備との出会いはまことにその時を得たものであった。さればこそこの廟の柏樹まで後の世の人に永く愛惜されるのである。憶いおこせばかつて私は成都の錦江のほとりの草亭から、東にめぐる路を行って、先主の廟に詣でたものだった。そこでは先主も武侯(諸葛孔明)も同じ廟域に祭られていた。その廟前にも柏樹があり、その枝幹は高く聳えて、成都の郊原にももの古りており、彩色した戸や牖は、奥深くひっそりとして人影もなかった。今この老木は、根が広く大きく、まことによき地を得てはびこっているが、おぐらく雲に分け入るほど、孤り高く立っているため、激しい風をうけることが多い。しかも今に至るまで、風雨にたゆまず、霜雪に屈せず、幾百年を経て、こうして立っているのは、けだし、神明の助けによるものであろうし、その真っ直ぐ

に堂々と成長したのは、これまた天地造化の作用であろう。このような大木というものは、もしどこかの大屋が傾いて、いったん棟梁となる材がいるという時には、必ず無くてはならぬもので、これを運ぶには、万匹の牛に牽かせても、邱山の如く重く、彼らの首を廻らすことであろう。もともとこの柏の樹は、外に文章、木目の美しさをあらわには示さぬが、それでも世の人は充分に驚嘆しているのだ。この柏もまた、棟梁の材として必要とあらば、何時でも切られることを厭いはせぬのだが、誰が果たしてこれを伐ってそこまで送り届けてくれるものがあるだろうか。この柏の樹の苦い心は蟻や螻蛄に入りこまれることを免れぬが、その香ばしい葉には、かつて鸞鳳を宿らせたこともあるのだ。遂にこの世に時を得ぬ志士、幽人たちよ徒らに歎き怨むことはない。古來、材の大なる者は、とかく世に用いられ難いこと、この老柏の運命と同じではなからうか。(目加田誠著『漢詩大系』抜粋)

博士はこの杜甫の詩を借りて、古柏と自身の境遇とを巧みに重ねあわせている。特に尾聯「志士幽人莫怨嗟・古來材大難爲用」は、博士の境遇を考えると胸に迫るものがある。不肖、学生時代生物の時間に日本住血吸虫症を勉強した記憶があるが、それが地元長野県の宮入博士の発見であることを知らず、今回記念館を見学してその業績の偉大さに感服した。長野県内では集団感染が発生しなかったことも相俟って未だに知名度が低い。野口英世・山極勝三郎、近くではノーベル医学生理学賞受賞の本庶佑博士に勝るとも劣らず、当時ノーベル賞候補にあがりながら果たせなかった不運は、博士が時代に先んじたため惜しまれてならない。

○明治期の医学事情

明治維新以来、日本では西洋医学の普及が急務とされ、医学教育者・軍医・地方衛生指導者の育成が喫緊の課題でした。明治10年に東京大学医学部が創設され、医学部本科卒業生（医学士）は留学も経験し、多くの東大の教員が輩出されました。明治32年に京都帝国大学医科大学が設置されるまで東京大学医学部は唯一の医学士の養成機関と供給源でした。

各府県においても明治初期から頻発するコレラ・赤痢・腸チフス・天然痘などの急性伝染病の対策が急務とされ、診療・公衆衛生・医学教育の拠点として公立病院兼医学校が急速に普及していきました。この府県立病院兼医学校に東京大学医学部の卒業生が病院長・医学校長として破格の待遇で招聘されました。

明治15年には医学校通則（文部省達第4号）が公布され、府県立医学校の卒業生が無試験で開業可能な甲種医学校と認定されるには、臨床実験用附属病院の設置（第三条）、4年以上の修学年限の設定（第五条）、最低3名の医学士登用（第十条）などの条件が課されることになり、さらに明治20年には府県立医学校の費用を地方税から支弁することを禁止する勅令第48号が公布されました。

こうした明治政府の西洋医学を急速に普及させる国家統制の医学教育政策により文部大臣管理下の高等中学校医学部（千葉・仙台・岡山・金沢・長崎）の医学校が設置され存続する一方、愛知・京都・大阪以外の府県立医学校は廃校、私立医学校も多くが廃校となりました。この結果、医学士は大学・軍・府県立病院兼医学校・高等学校医学部に吸収されることとなりました。

東京大学医学部でのエリート教育に対して、明治初期から外国人教員による医学教育を府県レベルで実現していたのは居留地を除けば、愛知・石川・静岡・岡山・京都で、京都は西洋医学摂取への意欲という点では先進的な地域でした。

○京都府医学校の設立

京都における近代医療と近代医学教育は明治5年11月1日に愛宕郡粟田口村（現京都市東山区）の天台宗青蓮院内に京都療病院が開設されたことに始まります。ドイツ人医師らによる診療と医学教育が行われ、明治12年4月には京都療病院医学校（4年制）を付設、明治14年7月には京都療病院医学校から独立して

京都府医学校（5年制、最初の1年は予科）を設置、明治36年6月には専門学校令による京都府医学校が京都府立医学専門学校（4年制）に改称、大正10年10月に大学令による京都府立医科大学（7年制）となり、昭和27年4月に新制京都府立医科大学（4年制）、昭和30年4月に6年制京都府立医科大学となり現在に至っています。

○慶之助の京都府医学校赴任

慶之助は明治24年9月27日付で京都府医学校に教諭として赴任します。生理学を担当していた栗生光謙教諭が退職したため、代わりに着任したものです。

慶之助は明治23年10月に帝国大学医科大学を卒業し、緒方正規教授の衛生学教室助手を努めていました。助手として1年ほど勤めたところで京都に行くことになった理由ははっきりとはわかりませんが、まずは医科大学を通じての同輩や先輩との関係性が浮かび上がるようです。

慶之助と同じく帝国大学医科大学で助手をしていた加門桂太郎が京都府医学校に解剖学の教諭として赴任したのが同じく明治24年の2月でした。加門桂太郎は慶之助と同じ明治23年の卒業です。またこの時の京都府医学校長が猪子止戈之助で明治15年に卒業、同年5月から京都府医学校外科学の教諭として着任していました。この加門桂太郎や猪子止戈之助との人脈と衛生学の専門教官という要素が相俟って慶之助が京都に行くことになったのではないかと推測しています。

京都府医学校では、物理学・化学・動物学・植物学・解剖学・組織学・生理学・病理学・薬物学・内科・外科・眼科・産科・内科臨床講義・外科臨床講義・衛生学・裁判医学などの学科目が設置され、慶之助は衛生学と生理学の科目を担当します。

○京都府医学会への入会

着任した翌月には、京都府医学会に入会し、翌年3月には評議員に推挙されます。医学会例会は月に3回あり、慶之助は「虎列拉黴菌培養法ニ就テ」、「實布埜里ノ原因ニ関スル新報告ニ就テ」、「睡眠細胞ニ就テ」、「癩病ノ菌」等の講演、京都府医学会雑誌への寄稿など精力的に活動しています。

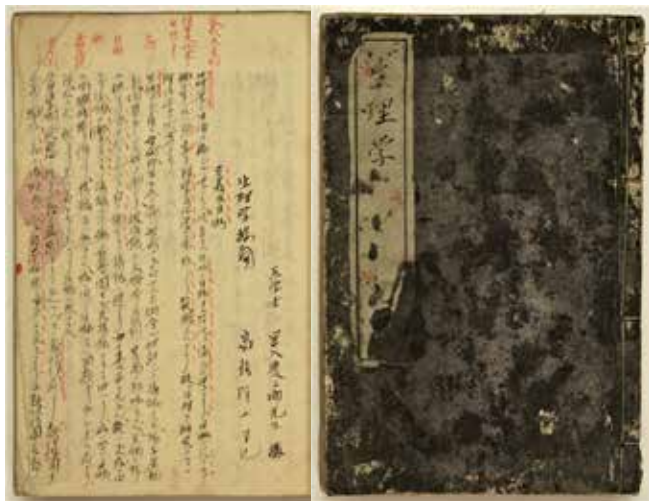
○医学校時代の慶之助

京都府医学校に着任したころのことを「当時私は大学を卒業した一年後で、京都の医学校に勤めて居

ました。思い出します。生理学の講義を担当いたし、前任者の後を受けて、ヘルムホルツが専ら力を入れた部分の五器官の整理の講釈を始め、第一の日に学生諸君から、ひどい非難の足ぶみをドドドドと鳴らされました。学生諸君はその私を、よく辛抱してくださいました。私も亦、よくもそれを辛抱致しました。」と回想しています（『ヘルムホルツ』の翻訳と私 河出書房 昭和18年2月）。

○京都府医学校での講義

当館には、慶之助が京都府医学校時代に講義を受



▲高橋隆三「生理学」ノート乾（巻之一）



▲高橋隆三「生理学」ノート坤（巻之二）

編集後記

○巻頭言は、新型コロナウイルス感染症が流行していますので、太田先生に感染症について執筆していただきました。○慶之助自筆漢詩については来館者で漢詩に造詣の深い寺田準氏（全日本漢詩連盟会員）に原稿をお願いしました。○京都府医学校学生の講義受講ノートは当館が収蔵している資料で、宮入源太郎前館長が資料収集したものです。

けた医学生の受講ノートが収蔵されています。京都府出身の高橋隆三の「生理学」ノート（和綴じ本2冊 乾・坤）、奥村一郎の「生理学」ノートと「皮膚病梅毒学」ノートの3点です。奥村ノートが明治25年から明治26年に行われた講義の受講ノート、高橋ノートが明治26年から明治27年に行われた講義の受講ノートでそれぞれのノートを見ると講義年次が異なるためか、必ずしも同じ講義内容ではないことが伺われます。高橋ノートにある五官器論の項では、第一知覚神・第二味神・第三嗅神・第四聴神・第五視神とあり、奥村ノートには五官機篇として、視神・聴官・味神・嗅神・觸神と筆記されています（註：神とは神経のこと）。また慶之助は「生理学」以外にも、「皮膚病梅毒学」の講義も行っていたことがわかります。

○医学生の回想

この当時医学生だった角田隆（明治25年入学・明治29年卒業／後に京都府医科大学学長）の回想（昭和28年9月学長公室にて・『京都府立医科大学八十年史』より）によると、「当時の医学教育と云うものは、難しい理論は二の次であり、西洋医学を普及させるために速成主義に一貫されていた。……宮入氏がクルンドの中心人物であり、それに反して加門氏（註：解剖学担当教諭）はお人好しであった。……ともかくあの頃は、大学を卒業すると直ぐに赴任したのであるから、独学せずにはやれなかった。……入学後は半期に一回の学期試験でも半年分の範囲を、学年試験で一年分の範囲を試験された、宮入先生だけが口頭試問を行い、他は筆記試験である。」（註：クルンド一世間的にしきりにやかましい人のこと）と回想しています。

慶之助は京都府医学校着任翌年の明治25年8月に大分県の葛城義方長女志ゅんと結婚し、明治27年5月15日付で京都府医学校を退職し、この後帝国大学大学院に入学します。

宮入慶之助記念館だより 第30号

発行者 特定非営利活動法人

宮入慶之助記念館

編集者 山口 明

〒388-8018 長野市篠ノ井西寺尾2322

Tel&Fax 026 (293) 4028

HP：《宮入慶之助記念館》で検索

発行日 2020年（令和2年）11月6日